

## ギジェルモ・エギアルテ氏講演会

### 「メキシコの二十世紀デザインと建築の扉」(二〇一六年五月十一日(水))

報告 久野量一

ラテンアメリカはメキシコにはじまり、メキシコに終わる——こんな言い伝えがラテンアメリカ通の間にあると言ったとしたらどうだろう。いかにもそれっぽく聞こえるのではないだろうか。実際のところ聞いたことはないが、やっぱりメキシコはラテンアメリカの入り口である。日本からメキシコを目指す場合、最近では増えてきた直行便に乗るか、あるいはアメリカ西海岸の都市やヒューストンなどを經由する。そんな風に行くと、実感として言うのだが、太平洋を越えている途中からだんだん英語が聞こえてきて、そこにスペイン語が混じり出し、最後はすっかりスペイン語しか聞こえない状態でメキシコシティに着くのだ。メキシコシティの空港に着いた時には心底ほっとする。たとえこれから先さらに南の国々を訪れる予定があったとしても、入国の行列に並んだりトイレの臭いを嗅いだ時、はじめてなのに、「ただいま」という言葉が漏れたとしても少しもおかしくない。メキシコというのは、身体がラテンアメリカに在ることを感じ、ああ、ラテンアメリカに来た! と思うのにぴったりの土地である。メキシコを通過点にして別の国や地方を訪れるようになって、メキシコのことはいつもついてまわるだろう。いつかまたメキシコを訪れたい、ひと段落したらメキシコに長く滞在しよう……その願いが叶うかどうか

かは別にして——その「ひと段落」というのがなかなかやつて来ないものなのだ——、メキシコは入り口でもあり、決して忘れられない国になる。

そんなメキシコをラテンアメリカの「はじまり」の土地としてみる場合、観光という視点、何も知らない素人の目線からメキシコを眺めること、眺め直すことは大切である。誰にでも「初体験」はあつて、きつとそのことは忘れられないのではないか。メキシコ観光局、その駐日事務所には日本語で講演をしてくれる方がいるというので、連絡を取ってみたところ快諾してくれた。駐日代表のギジェルモ・エギアルテさんである。

講演ではメキシコシティ、プエブラ、オアハカ(中央高原の三都市)に分けて、メキシコの文化やデザインについて話してくださいました。メキシコシティは海拔が高く太陽光線も強いため、色の見え方、輝きが他の土地とは異なるという話にはなるほどと思った。メキシコといえばバロックだが、チレス・エン・ノガータという料理さえもバロックなのだという。

メキシコ・デザインの特徴は「伝統とアヴァンギャルド」である。その事例として示されたのは、一九六八年のオリンピックのエンブレムである。日本でも色々な意味で取りざたされたオリンピックのエンブレムだ(それにしても、あの大騒ぎはなん

だったのだろうか?。メキシコ・オリンピックのエンブレムは古代文明の文様が現代風なデザインでアレンジされている。インターネットでも検索可能だから探していただきたい。メキシコの地下鉄の駅にはどの駅にもロゴマークがあつて、文字が読めない人のためにもわかるようにデザインされている。文字世界にばかり気をとられていると案外無視しがちで、筆者などはメキシコ留学中に、「あの駅はガチョウのロゴマークだね」と他人に言われてようやく気付いたことがある(東京の地下鉄の駅はアルファベットと数字で置き換えられるが、あれも日本語が苦手な人の方策だろう)。

エギアルテさんは建築が専門で、特にメキシコが生んだ現代建築家のルイス・バラガンを研究している。確かにメキシコといえば、先住民文化の巨大な遺跡群があるかと思えば、征服以降に建造され、ラテンアメリカ最大と言われる大聖堂もあるし、素晴らしい現代建築もあちこちに見られる。メキシコのメロマンティックな建築群は、多分ブラジルと並んでラテンアメリカでも注目に値する。

今回は現在の本職である観光局代表としての職務に忠実に、メキシコがいかにかに他にない魅力を備えた土地であるかということに力点を置き、建築については深く掘り下げてくださらなかった。次回はずいぶんバラガンについて存分に話してもらいたいと考えている。